巻頭言

「ひ弱」な「男らしさ」礼賛

御巫（みかなぎ）　由美子（ゆみこ）

「男らしさ」の意味は文化や時代によってさまざまだが、たいていの場合、戦闘行為、戦（兵）士や軍隊は「男らしさ」と結びつき、「女らしさ」とは結びつかない。一般的には、戦いによって愛するものや国を「守る」のは「男らしい」行為であり「守られ」「支え」「慰め」るのは「女らしい」行為である。しかし第二次世界大戦後の日本では、その悲惨な経験から「男らしさ」が戦争や軍隊とは結びつけられてこなかった。戦後日本の男たちに求められたものは、暴力でも腕力でもなく、経済力でありそしてそれを得るための技術や知性だった。

残念なことに、そう遠くない将来、その愛すべき（？）日本の「ひ弱な」「男らしさ」が、再び暴力性と結びつけられるかもしれない。そう憂慮させる根拠は、政治の世界に見いだすことができる。1991年湾岸戦争の際、日本のとった政策は、お金は出すが人は出さない「小切手外交」だ、と諸外国から批判された。このことをきっかけとして、日本政府は必要とあれば自衛隊を海外に派遣し、「平和に貢献」できるよう政策を転換してきた。それを示す最近の出来事としては、2006年末、防衛庁が省に昇格し、従来国内の防衛に限られていた自衛隊の本来任務に海外派遣が加えられたことがあげられよう。安倍政権の目論見が成功すれば、近い将来憲法第９条は改正され、自衛隊は「普通の」軍隊となり、日米同盟に「対等」なパートナーとしてかかわる日がやってきそうだ。そのような時代の流れの中、「ひ弱」でも技術やアイデアがあればよかった日本の「男らしさ」は、身体を張って「国際平和」や「国」や愛する人を「守れる」ことを意味することになるかもしれない。しかし敢えて言おう。それは「ロマンチック」かもしれないが、暴力礼賛であることに変わりない、と。

■プロフィール　国際基督教大学社会科学科教授、プリンストン大学PhD（政治学博士）。主要著作『女性と政治』（新評論,1999年）。現在は、男性性の移り変わりと日本の対外政策のかかわりについて研究、執筆中。